

氏 名 ぼそ や まさ し 細 谷 昌 志
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 論 文 博 第 350 号
 学位授与の日付 平 成 10 年 9 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学 位 論 文 題 目 観念と表象
 —カント『判断力批判』研究—

(主査)
 論文調査委員 教授 長谷正當 教授 藺田 坦 教授 藤田正勝

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、基本的にカントの『判断力批判』の立場に立ち、カントの超越論的観念論の枠組みのなかで思惟しつつ、「観念と表象」をめぐる真実在の問題を考察したものである。論者は、我々の心に生じる意識内容としての「観念」をまず「表象」に還元し、しかるのち、我々の表象の源泉に立ち返って、その内実を超越論的に明らかにする。本論文において、論者は「表象」が人間的思考の超えることのできない制約であり、それゆえに哲学的思考の出発点をなすものであると捉えて、表象に立脚して思考してゆく道を「表象の道」とし、その道を歩むことを本論文の課題とする。

我々の時代が「表象の時代」であることがまず明らかにされる。我々の周りには、言語・神話・芸術・宗教・科学など、広範な文化領域における、さまざまな「表象形式」が存在している。近代という時代が「表象の時代」であると言い得ることは、直接的にはライプニッツがモノドロジーで展開したことであるが、また近年の観念学(記号論や構造主義)や集合表象(言語、習慣・無意識など)の諸研究が明らかにしたことでもある。一方、近代の終焉を唱えて登場した現代の哲学(たとえばポスト構造主義)が、「意識による表象の統治」の破棄と「主観性の消去」を主張して、「意識」と「表象」に基づく思考の解体を説いている。

主観性の消去と表象の解体という事態は、意識の立場からの脱却がそのまま「表象性の突破」であるという、哲学史上これまで繰り返し主張された見解と通底している。意識と表象に由来する「間接性」と「隔離性」は、つねに神秘主義や生の哲学によって厳しく批判されてきた。また、ヘーゲルは表象的思惟を超えた絶対知をめざして、表象性の突破を自己の哲学の課題とした。哲学史を通覧すれば、表象を廃棄すること、表象を超えることが、そのままカントを超えることに直結していたといえる。

しかし、論者はカントにとどまって、人間的思考にとつての表象の意義について再考する。論者は「われわれは表象を原因として活動するという内的原理をもっており、それが人間的生である」というカントの言葉を取り上げ、表象は、神でも動物でもない我々人間の固有の境位であり、かつ必然的制約であるとして、そもそも「表象性を超えるとはどういうことか」、はたして「表象性は超えられるべきものなのか」と問う。本論において論者はあくまで表象の立場にとどまり、そこで思惟してゆくとして、その立場にたって思考することを「表象の道」とする。

論者が表象の立場に立つ理由は、表象の立場が人間の固有の境位であってこれを超えるべきではないがゆえに、表象はまた哲学の出発点として位置づけられなければならないと論者が考えることにある。我々が哲学的思惟を始めるとき、その出発点となるのは、「主観」でも「客観」でも、「主客合一」でも「主客未分」でもなく、「私は考えるがつねに私の表象にともなわねばならない」とカントが言う意味での「表象」でなければならない。表象を哲学の出発点として、可能な限り「表象の道」を辿ろうとするのが、本論の主眼である。

表象する(vorstellen)、つまり、前に立てる(vor-stellen)とは「自分自身の前(という外)へ立てる」とともに、「自分自身に向けて(内へと)立てる」という二重の構造を有している。前者によつて対象の対象性が、後者によつて意識の自

己関係性（主観の主観性）が成立してくる。表象においては、主観と客観との間に、ある種の「隔たり」がある。しかし、表象の構造に由来するかかる間接性と離隔性は、自己が自己となり物が物となる領域を確保せしめる。主観の主観性が同時に対象の対象性であることが、カントの超越的哲学の眼目であり、かかる超越論的真理を明らかにすることが「表象の道」において論者が企てていることでもある。

序論において、本論の全体的構想が概観される。

第一章において、表象の道と判断との関わりが考察される。表象の道は、認識に関わる問題としては、判断の事柄であるが、論者は、判断の実存的構造を解明することを通して、表象の道が「神と自己」に至るだけではなく、「自己と世界」を索ての旅でもあることを明らかにする。その際、「仮象の論理」に陥らないために、「超越論の場所論」が要求される。

第二章において、「表象の道」の位置と方向を定位するために、『判断力批判』の「第一序論」をもとに、純粋理性の建築術的な体系性の観点から、哲学一般の見取り図が提示される。そして、概念の対象への適用範囲を考慮してなされた、「領野・地盤・圏域」の三区分に注目する。そのなかで論者がとりわけ注目するのは「豊饒な経験的世界の低地」としての「地盤」である。それは、悟性の範疇によっては汲みつくすことのできない経験的多様性と異種性を含むところの、「特殊なるもの」の世界、「個別的なるもの」の地平である。そこに、美的体験や生命の原理を可能にする世界が横たわっていることが示される。

第三章において、美的体験や生命の原理を可能にする世界が考察される。自然が合目的性に則って技巧的に自らを特殊化するとき、美と生命とがわれわれの反省的判断力に対して開示されてくる。つまり、自然的所産がひとつの技巧として、主観的・形式的に知覚されるとき、美が成立し、客観的・実在的に観念にしたがって把握されれば、そこに有機体（生命）が成立してくる。論者のいう「表象の道」は、かかる世界と深く関わるが、その際、重要となってくるのは反省的判断力と構想力の二つの能力である。とりわけ、特殊に対して普遍を見いだす能力である反省的判断力の超越論的原理の探求が課題とされている。

第四章において、論者は反省的判断力と構想力を哲学のオルガノンとし、美と生命の現象を思考のモデルとして、表象の道を遂行する。天才論に至る、美と芸術とを扱った第四章は単なる美学や芸術論ではなく、反省的判断力の構造と機能を通して、形而上学的内的可能性を探ろうとしたものである。

第五章において、構想力の問題が主題化されており、これは本論文のひとつの中核をなすものである。構想力は、「心の根本能力」として、人間存在と世界の在り方を形而上学的に規定するものである。カッシーラが言うように、「現実性」と「可能性」との差異を生きる人間にとって、構想力は人間存在の本質的要因であり、それなしには人間的生は存在しえない。「主観－客観－分離」という意識の立場は、一般に指摘されるような、単なる分裂の場ではなく、物と自己が隔離しているがゆえに構想力の働きがそこで可能となるような「総合」の場である。それゆえ、意識に開けた「隔たり」や、表象のもつ「間接性」を、あたかも靴下のほころびを縫うように、知的直観や絶対知などによって、むやみに塗りつぶしたり、安易に橋をかけたりするべきではないと論者は言う。大切なのは、産出的構想力による総合の働きである。産出的構想力の働きは、直接的には天才のうちに目撃される。その実例は、レオナルド・ダヴィンチやセザンヌのうちに見いだされる。しかし、産出的構想力は「図式性」を介して「形の論理」となって、また、各種の宗教的表象（神話やトーテムや仮面など）を形成している。そこに、豊饒な文化表象の世界が展開されるが、それを支えているのが構想力にほかならない。前述した表象性の解体や主観性の消去を主張する思想は、実は、自らの構想力の貧困がもたらした結果にすぎない、と論者は言う。

第六章では、芸術における表現作用が考察される。構想力とは、「直観において対象が現前していなくとも、対象を表象する能力」であるが、それは、「見ること」と「触れること」という人間の異なった知覚の「裂目」に生ずる人間の固有の働きとみることができる。パークリーの純粋知覚の説は、知覚というものの一つの在り方を教えてくれる。さらに、論者は「目の手」の問題を通して、芸術における表象形成作用を考察する。次に、ルネサンスの遠近法を分析し、そこにおける「身体図式」を介して、絵画における「奥行き表現」の追求の意味を考える。それはメルロー＝ポンティのいう「見えるものと見えないもの」の問題につながってゆく。以上の考察を通して、「見る」とは一般にどういうことかを、論者は明らかにする。

第七章では、「表象と世界」の問題が考察される。表象の道はここにおいて目的地に達することになる。ライプニッツによれば、表象は「一において多を表現すること」である。モナドが表象をもつとは、無数のモナドが各々の一の中に多を

含みつつ多を表現し、そこに厳粛な対応関係が成立することを意味している。モナドの表象は外にあるものの表現でありながら、そのこと自体がそのままに自己のうちの表出である。この「外を内において表現し、内を外に表出する」ということが、モナドの表現的原理にほかならない。そこに、おのおののモナドがおのおのの視点から一つの世界を映すことによって互いに相結合する世界の成立する根拠が存する。したがって世界は、おのおののモナドの表象に応じて、万物が重々無尽に相対し相照応する調和の体系をなすこととなる。それがライプニッツのいう「共可能的なもの」の世界である。可能性の「共可能性」が、存在者の実存的根拠をなすとともに、すべてを相互に根拠づけあうことによって成り立つ世界の構造原理でもある。表象の構造は、表象の「表現作用」を介して、世界の構造となる。ここに論者の「表象の道」と「行為的直観」を説く後期西田哲学との接点がある。行為的直観の立場とは、内から働く自己を内からではなく、自己を外からみることによって働き行く世界である。西田は世界を、個物と個物との相互限定の構造で捉え、個物と個物とが相対立し、相互否定的に一として動き行く世界を「表現的世界」として考える。どこまでも自己自身を限定する個物の相互限定の世界は、個物が世界を映すことによって個物であり、逆に、個物が世界に映されることによって世界はわれわれにおいて表現的となる。

論者は「表象の立場」を総括し、次のような要因をそれが含んでいることを示す。①「われわれは表象を通してしか対象に関係しえない」という有限な人間存在の存在性に起因する制約であること、②意識という「主観－客観－分離」の立場であること、③「主観の主観性が対象の対象性」をなすこと、④「超越的なものの内在化」であること、である。西田が「自己自身を映す」ということは、自己が絶対に自己の外に出ることである。自己が絶対自己自身を否定することである。しかしそこに对象的に自己を見ることである。自己が自己でありながら、他においであるのである」というとき、それは、論者の言う表象の道と異なるものではない。

論文審査の結果の要旨

本論文は「構想力」の問題を中心にカント哲学の全体を見直すとともに、『判断力批判』に主眼において構想力の産出的働きを究明したものである。その際、論者はカントの思索の基点に「表象」が置かれていることに注目して、表象を人間の思索の固有の境位として捉え、表象を構想力との関わりにおいて追求しつつ、表象に基点をおく思考の特質を明らかにする。そのような表象の立場に立つ思考を「表象の道」として捉え、その可能性や意義を究明したところに本論文の意義がある。

表象的思考の立場は、哲学史において繰り返し批判されてきたものであって、意識や表象の構造に由来する「間接性」や「隔離性」はつねに神秘主義や生の哲学によって批判されてきた。ヘーゲルは表象的思考を超えた絶対知を目指して、有限な表象性の立場を突破することを自己の哲学の課題としたが、哲学史においては、カントを超えることが表象の立場を超えることであった。

一方、人間をとりまく言語・神話・芸術・宗教・科学など広範な文化領域におけるさまざまな「表象形式」や、言語、慣習、無意識などの「集合表象」の諸研究は、近代という時代を「表象の時代」として特色づけ、人間を取りまく表象の世界の広がりや厚みを開示してきた。しかし、「意識による表象の統治」の解体や「主観性」の消去を主張するポストモダンの思想潮流のなかで、そのような表象の立場は崩壊しつつある。

そのような状況のなかで、論者は表象性は果たして乗り越えられるべきかを問い直し、「われわれは表象を原因として活動するという内的原理をもっており、それが人間的生である」というカントの洞察に立ち返って、「表象」は神でも動物でもないわれわれ人間の固有の境位かつ制約であるとして、表象的に思考する立場を擁護する。そして、その立場を「表象の道」と規定して、その道を歩むことにおいて開けてくる様々な展望を叙述する。

論者は表象の立場の四つの要因として、①われわれは表象を通してしか対象に関係しえないこと、②意識という主観－客観の立場であること、③主観の主観性が対象の対象性をなすこと、④超越的なものの内在化であること、を挙げている。論者はそのうち①と④に特に注目して、われわれが対象に関係する唯一の道である表象のもつ「表現」としての意義を明らかにする。「表象」において、主観の内奥の「表出」が世界や超越的他者の「表現」と重なりあうところに、表象の意義を捉え、表象的思考の可能性を掘り下げているところに本論文の主要な意義がある。

本論文の独創的なところとして次の諸点があげられる。

①論者は、表象の道の位置と方向を定位するために、『判断力批判』の「第一序論」をもとに、純粋理性の建築術的な体

系性の観点から哲学一般の見取図を示し、概念の対象への適用範囲を「領野 (Feld)・地盤 (Boden)・圏域 (Gebiet)」として区分する。そして、悟性の範疇によっては汲みつくすことのできない経験的多様性と異種性を含むところの「特殊なるもの」の世界、「偶然的なもの」の地平を、表象の道がそこへと通じている「経験の豊饒な低地としての地盤」とする。論者はそこに反省的判断力と構想力の働く世界を捉えて、美と生命の現象を思考モデルとして表象の道を遂行しているが、論者の叙述は極めて的確で説得的である。

②論者は、産出的構想力の働きは直接的には天才のうちに目撃されるとして、その実例をレオナルド・ダ・ヴィンチやセザンヌのうちに捉えて分析する一方、各種の宗教的表象（神話やトーテムや仮面）を取り上げ、産出的構想力の働きが図式性を介して形の論理となって展開する過程や様相を分析している。とりわけ、トーテムや仮面において示されている形の論理の展開は論者の独自な見解が示されていて意義深いものである。

③論者は、「表象の道」の落ち着き先を求めて、それをライブニッツの表現という概念に見い出だしている。表象とは「一において多を表現すること」であるが、モノダの表象は多なるものの表現でありながら、そのことはまた自己の表出でもある。表象において、論者は自己の表出と「超越的なものの内在化」とを捉え、そこに「個物が世界を映すことによって個物であり、個物が世界に映されることによって、世界が個物において表現的となる」とする西田の「表現的世界」と通じるものを捉え、表象的思考が秘めている宗教的意義とも言うべきものを掘り下げている。

④本論文でのカント解釈は『判断力批判』に主眼が置かれているが、カントの哲学全体の建築術的な体系性を見通した包括的な視野と、細部に向けられた繊細な注意をもって、その叙述は進められている。同時に、論者の視野はカントを超えた広がりを持ち、とりわけ、美と芸術を扱った第三章と第四章は、カントのみならずシェリングやヘーゲルを含めて反省的判断力の構造と機能を追求したものとして極めて密度の高いものである。

しかし、若干望まれる点がないわけではない。本論文の中心をなす「表象の道」の意義は、第六章において西田の「表現」の概念と関連づけて追求され、明確化されているが、しかし、そこで得られた知見がそれ以前の各章に返照されて、そこから全体が有機的に見通されるような緊密性と統一性にまでなお至っていない。しかし、これは本論文の構成の仕方に関して配慮すべき点であって、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値のあるものと認められる。なお、平成10年7月10日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。